

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	杉野 要人（三重県）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第11号
学位授与の日付	平成27年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学位論文題目	境界性人格障害と自我構造 —「枠のない境界例」と「枠のある境界例」—
論文審査委員	主査 東山 弘子（佛教大学教授） 副査 石原 宏（佛教大学准教授） 副査 氏原 寛 (帝塚山学院大学大学院元教授 現大学院講師)

〔1〕論文の概要

境界性人格障害は、精神科医・臨床心理士にとって治療的アプローチが難しい障害である。理由は、不安定で激しい対人関係、衝動的であること、感情の変わりやすさ、不適切な激しい怒りとそれを制御できないこと、等により治療者と信頼のある関係が作りにくいからである。境界性人格障害の定義はDSM-Ⅲとその改訂版DSM-Ⅲ-Rでなされているが、「境界性」と名付けられていることから分かるように、実際のクライアントの行動にはかなりの差が見られる。これらの臨床像の議論もDSM-Ⅳ-TRによって一応の論議の収束を見たが、成人期境界例と青年期境界例の違い、成人期境界例の形成機序と破綻については明確になっていない。

本論文は、長年、境界性人格障害の心理療法を行ってきた論者が、実践から得られた知見を基に、境界性人格障害の自我構造とそれに依拠する心理治療構造を明らかにしたものである。境界性人格障害の自我構造を新たに規定するために、著者は「枠のない境界例」と「枠のある境界例」という、独自の分類を提示し、境界性人格障害の心理療法を有効にする理解と方法を提示し、事例を通して立証を行なった。

内容は次のとおりである。

- 1章 問題と目的
- 2章 境界例における「同一性の不現実性」
- 3章 青年期境界例の「同一性の形成と破たん」
- 4章 成人期境界例の「外囲いの同一性」の形成

5 章 事例研究

事例 1 青年期境界例の同一性の破たんがその三つの構成要素の破綻へと至った事例

事例 2 青年期における意味ある他者との人間関係の体験が青年期境界例の同一性の形成と破たんとを左右すると考えられる事例

事例 3 外囲いの同一性の形成機序の心理学的意味を把握することができる事例

事例 4 境界性人格障害を有しながらも高年に至るまで、ほとんど境界例病理を顕在化せずに日常生活を送ることができた事例

6 章 今後の課題

第 1 章では、境界性人格障害（以下、境界例とする）の病因論と臨床像の歴史が述べられた。

欧米での心理的・精神的病の歴史が述べられている。1950 年頃から、境界例の記述が見られ始め、1967 年から 19687 年に発表されたカーンバーグらの論文によって、病状が明確にされていった。また、心理療法の技法は古典的精神分析から支持的療法（サポーターティブ・セラピー）が部有力視されるようになった。50 年代半ばに最初の紹介論文が発表されている。80 年代に入って精神科医と臨床心理学者による研究が活発になる。定義に関しては、現在においても種々の議論がなされているが、論者は、人格が機能する水準として、精神病水準、境界例水準、神経症水準にわけ、境界例水準で機能している人格を境界例とすることになっている。

第 2 章では、境界例における「同一性の不確実性」が述べられた。

「同一性の不確実性」は、境界例を規定する主要な病理現象の一つである。「同一性の不確実性」が生起するのは、発達過程において同一性形成が何らかの影響により阻害されたためである。阻害要因に関しては種々の説があるが、それを限定的に、狭くしてしまうと心理療法の適用が固定的になる。論者は多くの境界例クライアントに会ってきた体験から、いろいろな説を参照しながら、自分自身の理論と療法を開拓してきた。境界例クライアントすべてに見られる、同一性再形成への願望に心理療法の中心を置くようになった。従来あまり論じてこられなかった成人期境界例の症状形成時期と現象を詳しく調べることから青年期境界例と成人期境界例の特質を検討し、論者独自の概念を打ち立てる機縁になった。

第 3 章では、「青年期境界例」の「同一性」の形成と破綻が論じられた。

境界例発症の時期は、通説では「成人期早期までに始まる」とされている。それは、青年期が「同一性の不確実性が増大するためである」からである。しかし、境界例のクライアントの心理療法を多く実施している心理療法家（鈴木茂など）には、境界例が「成人期早期」までに発症せず、それ以降に発症するクライアントを少なからず経験している。

成人期早期に境界例を発症させたクライアントは、自我同一性が青年期特有の混乱と、同一性を保持するための集団的同一化を持てなかった人たちである。青年期には、運動クラブ、文芸クラブ、宗教への傾倒など、成人としての自我同一性の新たな構築を促すための全段階としての、集団的同一化を求め、それによる揺らぎの軽減によって、成人としての自我同一性の形成をはかり、成人として成長していく。集団が苦手で集団的同一化を持てなかったり、集団から疎外されたり、出ていかざるを得なかった自我の弱い思春期・青

年前期の人たちは、この時点で境界性人格障害を発症させる。自我が弱くても、集団にとどまった人たちは、この時点では境界性人格障害を発症させない。しかし、成人の自我同一性は、自我の確立であるから、集団的同一化から自分自身としての距離を取らなければならない。成人としての自我同一性が確立されないまま、何らかの理由で集団的同一化から離れざるを得なかった人は、この時点で境界性人格障害を発症する。子ども性をのこしたまま、成人になってもある種の集団に所属している人たちの中には、境界性人格障害を発症しないが、大人になりきれないでロマンを追い続けている人々も存在する。

第4章では、成人期境界例の「外囲いの同一性」の形成が論じられた。

「外囲いの同一性」の生成機序が、「宗教を信仰する一般個人」は、集団として共同の「文化・価値観」を持っている。宗教ほど強力ではないが、共通の「文化・価値観」を持っている集団も存在する。このような集団としての「文化・価値観」の共有性を「外囲いの同一性」と定義した。成人期境界例は、成人期までは集団としての「文化・価値観」を共有していたが、「身近で重要な他者」からの異議によって、自己の「外囲いの同一性」が危険にさらされる。成人の自我は「外囲いの同一性」ではなくて、自我同一性が確立された自我であるが、それを確立することができない人たちは、自我の崩壊をくい止めるためには、「外囲いの同一性」を守るいがいにはすべはない。そのため、「身近で重要な他者」との人間関係を「作為的」に回避するしかない。「身近で重要な他者」と、作為的な人間関係しか作れない人たちが「成人期境界例」である。彼ら自身は「外囲いの同一性」によって、極度の自我崩壊をしなくてもすむが、彼らの「身近で重要な他者」（配偶者や子ども等）に、神経症や人格障害を誘発する危険な状況を作り出すことが多い。また、「身近で重要な他者」からの現実的問題提起によって、「外囲いの同一性」が破綻し、「成人期境界例」を独善的世界から現実へ引き戻す機会を与える。

第5章では、上記の論点を実証するために、4つの事例が記述・考察された。

第6章は、本論文の独創的論考である「枠のない境界例」と「枠のある境界例」についてのこのごの研究課題が提示されている。

〔2〕 審査結果の要旨

著者は、「境界性人格障害」のなかで、包括的に論じられてきた青年期境界例とは異なる病態と経過をたどる「成人期境界例」の存在に着目し、その病態と経過の特徴、人格変容に貢献する治療技法の考察を文献学的に分析検討し、新しい知見を実際の心理臨床事例のなかで実証したところにオリジナリティが認められる。DSMの歴史、代表的心理療法事例の緻密な分析と考察および現代の課題を見出し、事例を現象学的に記述するという研究方法によって実証しえたことは、学問的臨床的ともに高く評価されることである。しかし、以下のような課題が指摘された。

1 著者は、成人期境界性人格障害であるという診断と見立てが成り立つという前提に立っている。心理療法を開始するに当たっては、相談開始時のアセスメントと確かな見立てが重要であるが、自験例のアセスメントと見立て検討が十分であるとは言えず、青年期の発達課題に失敗し、自己の崩壊へと至る病態を示す近接の他の診断名の範疇に該当するかもしれないという可能性を払拭できない。

2 成人期境界性人格障害の心理療法は困難を極め、多くの場合プロセス途中で挫折す

ることが多いが、著者の卓越した心理療法の技法と真摯な取り組みによってクライアントの人格変容が成し遂げられていることは驚異的であり、著者の心の深層に働くセラピストとしての感受性と読みがクライアントを動かす動因であることは確かであるが、言語化を試みながらも十分に言語化するには至っていないために、普遍化に至らず「個」にとどまっていることは悔やまれる。

このような不十分な点が指摘できるが、著者が多様な境界性人格障害を著者独自の分類として提起した「枠のある境界例」と「枠のない境界例」という分類は「境界性人格障害」の心理療法をする上で価値あるものであり、多くの心理療法家の実践に寄与する知見であることは疑う余地がなく、学会誌においても高く評価され、今後の発展性を期待できる内容である。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。